

学位論文題名

「小説」論—『小説神髓』と近代

学位論文内容の要旨

[形式] 本論文は目次、パースペクティブ、第一章～第七章、注、主要文献表、あとがき、索引によって構成され、岩波書店より一九九九年九月に出版されている。本文290頁、索引3頁で、四百字詰原稿用紙に換算して約630枚に相当する。

[内容] 本論文は、日本の近代において、はじめて小説の意義を包括的に提示したことで知られる坪内逍遙の『小説神髓』を、主に三つの軸から考察したものである。その第一は、小説を芸術の一分野と見なす逍遙の試みが、「英語圏」のそれとほぼ同時になされたことに着目し、そうした同時性を盾として、必ずしも直接的な影響関係に還元しえない双方の小説認識の共通性を明らかにしたことであり、ここでは特に十九世紀後半に書かれた多くの「英語圏の修辞書」および小説論と、『小説神髓』との諸関係が問われている。また、その一方で本論文は、逍遙が小説という概念を提示する上で参照した、近世の読本や人情本などに示される物語観を分析し、それを逍遙がどのように継承し読み変えていったのかを検討しているが、これが第二の軸に他ならない。そして、上の二つの軸の交点に、逍遙独自の小説観が形成される経緯を解き明かし、それがまた、明治前期の文学状況ばかりか、日本の近代における文学認識の中でも突出した一面をもちながら、通俗化されて継承されたもう一方の面が近代の文学観を長く支配したことを論証した点が、本論の第三の軸ともいべきものである。

第一章から第三章にかけては、このうちの第一と第二の軸を中心に論が展開する。まず第一の軸に関して亀井氏は、十九世紀後半から、その関心を詩から散文へと移し始める「英語圏の修辞書」群が、分節化した対象を連続化し、更にそれを統合するものとして小説の「語り」の機能を定義してゆく経緯を明らかにする。次いで小説の内容面でも、主なストーリーと挿話を統合する中心的な思想の必要性が叫ばれ、また、それに対応する作家の主体性が次第に認知されるようになることを確認する。そして、こうした「修辞書」の認識を引き継ぐ形で、小説の芸術性を主張する小説論が、作家主体の個性と独自性を求め始めると論じている。

このような論証によって、それ以前には雑駁で無定型なもので見なされていた小説には、形式(=「語り」)と内容の両面で統合点が認められてゆく経緯が明らかにされるが、亀井氏は更にこの統合点に対応する一貫性、つまり開始—中間—終結によって有機的に結ばれる内容と、それを観察する視点の一貫性に関する見解が、「修辞書」に見出される点をも見

逃していない。また、それに加えて、このような一貫性が単調さに墮しないために、一貫性を損なわない範囲で、ストーリーの逸脱や回想の挿入といった多様性が許容され始める点をも明らかにしている。そして、その上で、こうした英語圏に芽生えはじめた小説認識の多くが、作者と主人公の特権化、筋の「脈絡通観」と「趣向の雑駁」（＝多様性）の許容などとして、逍遙の『小説神髓』にも共有されていること、それもここで分析された「修辞書」の多くを逍遙が読んでいないにもかかわらず、小説観の同時代的な共振が起こっていると論じている。

一方、第二の軸としてこれらの章で問われているのは、柳亭種彦や曲亭馬琴を中心とした近世の物語観（＝特に稗史観）である。その中で亀井氏は、馬琴の名高い物語論・稗史七法則を分析することで、馬琴が主人公を物語に一貫して存在すべきものとは見なしていなかった点を指摘し、逍遙の小説観との大きな違いを浮き彫りにする。また「英語圏の修辞書」においては、小説が個人の心情を描き、それを読者の孤独な内面に訴えかけるものと捉えられはしても、むしろそうした性質ゆえに公共性を損なうことが憂慮されていたのに対し、逍遙にはそうした憂慮がまったくみられない点に注目する。そして、そこに「英語圏」と明治日本の公共性と道德観の差異をみるとともに、逍遙のこうした傾向の淵源を、種彦や馬琴の物語観＝稗史観に求めている。つまり種彦や馬琴は、政治権力の正当性を描く正史の表の論理に対して、日常的なコミュニケーションや人情といった裏を描くことに稗史の価値を見出すが、逍遙はこうした稗史観を受け継いでいたために、人間の隠れた心情という裏の世界を描くことにためらいがないというのである。

続く第四章から第六章では、逍遙が『小説神髓』において示した小説観、文体観が更に詳細に検討されるとともに、明治前半期およびその後における小説観、文体観との関係が論じられる。最初に亀井氏が俎上に載せるのは、一貫性に対する多様性（＝「趣向の雑駁」）として、逍遙が個々の登場人物の「内部の思想<sup>おもい</sup>」を表面化しようと試みる点であり、この結果、一貫性をもつ作者は背後に身を潜め、登場人物の多様な心理の綾が前景化されるという二元論的な機制が生まれることを明らかにする。このような二元論的な機制は、自由奔放に表出される多様な「情」と、それを調整し思慮する「心」という荻生徂徠以来の系譜に連なるものであることが確認されるが、しかしそれだけにとどまらない。「心」と「情」とのこうした関係が、逍遙において、それを表現するにふさわしい言語としての雅言/俗言の対比を生み、更にそれを表現する小説上の場として地の文/科白の対比へとスライドされることを、亀井氏は明らかにしてゆく。そして、その上で、こうした一連の区分を支える作者/登場人物という二元論が見失われることで、主人公が作者の分身とされ、登場人物の心情や行動を作者の思想の反映と見なす、大正期以降の私小説的、心境小説的な文学観が定着してゆくと指摘している。

それに加えて本論文は、雅言/俗言といった逍遙の文体観に更に綿密な分析を施し、特に

小説では科白で用いられる俗言の軸において、それが単なる日常語の音声の再現をめざすものではない点をも解明している。つまり、近世において用いられ始める引用符や句読法が、日常語の再現をねらったものというより、あくまで書き言葉と話し言葉の差異を認識した上で、正確には再現しえない話し言葉にいかにして真实性を付与するかという工夫から生み出され、それを逍遙が受け継いでいること。それとともに、逍遙にとっての俗言は、それを話す人や指示される事物の特質を写す＝移すことであって、即物的に音声を文字で写すものとは違っていったこと。そうした逍遙の言語観を検討した上で亀井氏は、近世の国学から明治前期の言文一致論者にみられる、音声の即物的転写といった「音声中心主義」とは別の系譜が存在することを明らかにし、その系譜を小説の言語の問題として読みかえてゆく逍遙の姿を浮き彫りにしている。また、地の文の言語に関しても、上のような言文一致批判の意識に加え、言文一致体の時制表現「た」に比べて、文語の時制表現の方が多様性と秩序とをあわせもっているという認識のもとに、逍遙が文語の採用に踏み切り、しかも科白と同様、一定の現実性を地の文にも付与する必要があるという自覚によって、雅言と俗言の折衷体を選択するにいたると指摘する。そしてこの結果、科白の俗言と地の文の雅俗折衷体には、その文体的な類似性ゆえに一種の干渉性が生じ、そこから科白と地の文とが相互に相対化しあう対話性が醸成される可能性を読みとっている。

最後の七章では、以上のような、現在の文学観においては切り捨てられてしまった逍遙の可能性の闡明という問題から一転して、逍遙が今日の文学観に遺した負の側面が明らかにされる。つまりここでは、小説を道徳的な鏡として、読者の反省を促すことにより、読者の内面の規範化と均質化を形成する道を逍遙が開き、しかもそれが、現在も負の遺産として遺されている事情が解明されている。

以上の点を総合的に評価すれば、逍遙が直接、目にした可能性のあるものを含め、多くの「英語圏」の「修辞書」を丹念に解読し、逍遙の小説観との同時性と共通性を明らかにすることで、西洋文学を遅れて受容した『小説神髓』という従来の説をくつがえした点に、本論文が拓いた第一の新局面がある。また既に一定の研究成果が示されていたとはいえ、『小説神髓』と近世の物語論との関係を独自の視点で再解釈し、単なる継承と断絶という点にとどまらず、「修辞書」と共通する認識と近世の物語観との、遭遇と葛藤の場において逍遙を捉え直したところにも、本論の独自の成果が示されている。論点が多岐にわたったこともあって、明治前期の文学、言語状況の把握がやや平板になるなど、問題点がないではないが、特に上の二点において、『小説神髓』研究および、近世から近代への文学観の形成と変容に関する研究としての意義は、十分に示されているものと判断できる。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽  
副 査 教 授 長 尾 輝 彦  
副 査 助 教 授 中 山 昭 彦  
副 査 助 教 授 権 錫 永

## 学 位 論 文 題 名

### 「小説」論—『小説神髓』と近代

本委員会は、上記の論文を審査するに際して、基礎的な手続きの面と内容面とに分け、本論文が新しい研究の方向を拓くものと評価できるか否かを検討した。このうち基礎的な手続きとして検討したのは、坪内逍遙の小説論『小説神髓』を、英語圏の修辞学書と日本近世の物語論との関係において考察するに際しての、必要とされる文献資料の適否、当該分野の研究史の把握の度合いと参考文献の理解度、引用文献の正確さ等の点であり、また内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各章ごとのテーマとその展開、主要な概念の厳密さと方法の有効性、学術研究としての達成度等についてである。以下、それらの検討の結果と本委員会の評価を、要点をしぼって説明していくことにする。

まず基礎的な手続きに関してであるが、本論文はイギリス、アメリカで十九世紀に出版された数多くの修辞学書を収集し、ほとんどが未訳の文献であるため、引用に際しては翻訳した上で、原文を注に配している。本委員会は、本論文の著者の英語理解力、翻訳の適否、収集された文献の妥当性についての検討を行ったが、英語の理解力と翻訳力は高い水準に達しており、また文献に関しても、『小説神髓』との関係を明らかにする上では、十分な質と量とを備えているという判断に達した。

また、近世の物語論に関しては、『小説神髓』に関連する文献を幅広く収集し、妥当な解釈が施されており、読本、人情本といった各ジャンルにおける諸規範を考慮していない点にやや問題は残るものの、ジャンルを越えて共有される物語認識を解明していく本論文の主旨からすれば、むしろ適切な対処であると判断した。

従来の研究史については、そのすべてが網羅されているとはいいい難いが、しかし本論文は、これまでの研究では本格的に扱われることのなかった修辞学書を対象として、従来の研究動向に大きな変更を迫るものである。したがって、テーマを共有しないものにまで言及する必要がないものと判断されるとともに、全体的な研究動向の適正な把握が問われる

ところであるが、そうした把握は十分になされており、またテーマ上、必要とされる研究文献も適切に引用されていると考えられる。

次に内容面についてであるが、本論文の目的の一つは、英語圏の修辞学書と小説論を幅広く踏査し、『小説神髓』の小説観との同時代的な共通性を明らかにすることにある。この点に関しては、日本と英語圏との道德観や時代状況の違いを把握し、当該文献を綿密に分析した上で、主題の一貫性、視点の統一、中心的な思想の必要性などの点で、双方が共通した認識に達していることが説得的に論じられている。また、十九世紀末に英語圏の小説論が小説の芸術性を主張し始めていることに注目し、この点でも、小説を「美術」として位置づけようとする『小説神髓』との同時代的な共通性があることが解明されているが、これについても、英語圏に限らず、フランスなどにおいても小説のジャンルとしての規定が意外なほど遅れたことが、最近の研究で明らかにされている点、日本における『小説神髓』執筆当時の「美術」という用語が、ほぼ西洋の「芸術」と同じ意味に用いられている点などに照らして、きわめて妥当な見解であると判断される。そして、上の二点の論証により、『小説神髓』が、西洋の小説観を遅れて一しかも多分に誤解して取り入れたとする従来の説に、大きな変更を促すことに成功している点が、本論文の重要な意義の一つであると評価することができる。

一方、本論文では、近世の物語観と『小説神髓』の小説観との関係が検討され、単なる継承と断絶の問題にとどまらない考察がなされている。人情や世情を描くものとしての物語の位置づけや、自由奔放に表出される「情」とそれを調整し思慮する「心」との二元論など、本論文は近世の物語観を逍遙が踏まえていることを明らかにするとともに、逍遙が西洋の小説観と遭遇することで、これを近代的な内面や、雅言/俗言の二元論的な言語認識へと変換していく過程が緻密な分析によって明らかにされており、継承か断絶かと対立的な評価軸でとらえてきた従来の研究に対して、継承でも断絶でもあるこのような地平を明らかにしたことが、本論文のもうひとつの大きな意義であると判断できる。

以上のように、本論文は、広範な資料調査と、厳密で独創的な文献解釈とによって、英語圏の修辞学書といった、これまで看過されてきた研究領域に光を当てる一方で、従来から注目されていた近世の物語論との関係にも新たな解釈を提示し、『小説神髓』研究に大きな変更を促すものである。『小説神髓』が書かれた明治前半期の記述がやや手薄になるなどの問題点はあるものの、上の点からみて、日本近代文学研究の貴重な研究成果たりえており、博士（文学）を授与する価値を十分に備えた論文であるとの結論に達した。